

# 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論 文 提 出 者	清水 唯行
論 文 審 査 委 員	(主 査) 朝日大学歯学部 教授 北井 則行 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 江尻 貞一 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 勝又 明敏
論 文 題 目  上顎中切歯部および側切歯部における上顎骨歯槽形態	
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>矯正歯科臨床において，上顎切歯の移動がどれだけ可能であるかということとを考慮して，診断，治療計画の立案および治療メカニクスを決定するためには，上顎骨歯槽部の前後的な厚さおよび歯槽内での歯根の位置を調べることが重要であると述べている．また，上顎骨歯槽形態と顎顔面形態の特徴との関連を知ることは，矯正歯科治療において，上顎切歯の移動量を決める際に重要であると述べている．本論文は，上顎中切歯部および側切歯部の上顎骨歯槽形態を，高解像度 CT を用いて調べ，歯軸傾斜角度，唇側歯槽傾斜角度，舌側歯槽傾斜角度および歯槽唇舌径との間の関連性と，それらの項目が顎顔面形態とどのように関連しているのか検討したものである．</p> <p>上顎中切歯および側切歯の歯根が完成している女性を被検者として，歯顎顔面用コーンビーム X 線 CT 装置を用いて記録し，三次元画像解析用ソフトウェアを用いて，ナジオン，前鼻棘および後鼻棘を通る上顎骨正中矢状平面に投影して，上顎中切歯部および側切歯部の歯軸傾斜角度，唇側歯槽傾斜角度，舌側歯槽傾斜角度および歯槽唇舌径を計測している．また，側面セファロ写真を用いて顎顔面形態に関する変量を計測している．方法の詳細は論文内容要旨の通りである．</p> <p>その結果，上顎骨歯槽形態に関する上顎中切歯部の変量と側切歯部の変量との間に有意の正の相関を認められた．中切歯部歯槽形態において，中切歯軸傾斜角度と中切歯部唇側歯槽傾斜角度との間，中切歯軸傾斜角度と中切歯部舌側歯槽傾斜角度との間に有意の正の相関を認め，中切歯部唇側歯槽傾斜角度と中切歯部歯槽唇舌径との間に有意の負の相関を認めたが，中切歯軸傾斜角度と中切歯部歯槽唇舌径との間，中切歯部唇側歯槽傾斜角度と中切歯部舌側歯槽傾斜角度との間，および中切歯部舌側歯槽傾斜角度と中切歯部歯槽唇舌径との間には有意の相関は認められなかった．側切歯部歯槽形態についても，同様の結果が得られた．また，中切歯部歯槽唇舌径と N-Me, N-PP, Me-PP との間，中切歯根尖-唇側歯槽間距離と N-Me, N-PP, Me-PP との間，中切歯根尖-舌側歯槽間距離と N-Me, N-PP との間に有意の負の相関</p>	

を認めたが、SNA 角、SNB 角、ANB 角との間には、それぞれ有意の相関が認めなかった。側切歯部歯槽唇舌径と N-Me、N-PP との間、側切歯根尖-唇側歯槽間距離と N-Me、N-PP、Me-PP との間、側切歯根尖-舌側歯槽間距離と N-PP との間に有意の負の相関を認めたが、SNA 角、SNB 角、ANB 角との間には、それぞれ有意の相関は認めなかった。

以上の結果から、上顎中切歯部歯槽唇舌径が小さいほど側切歯部歯槽唇舌径が小さいこと、歯軸が唇側へ傾斜すればするほど、唇側歯槽表面と舌側歯槽表面も唇側へ傾斜すること、唇側歯槽表面が唇側へ傾斜するほど、歯槽唇舌径が小さくなることを明らかにしている。また、顔面高が大きいほど、歯槽唇舌径が小さくなり、歯根と唇側歯槽表面との距離も舌側歯槽表面との距離も小さくなることを明らかにしている。

本論文は、上顎中切歯部および側切歯部の上顎骨歯槽形態を評価したもので、歯科矯正学分野における診断学および治療学の発展に貢献できると考えられる。よって、審査委員は本論文を博士（歯学）の学位を授与するに値するものと判断した。